まい　あーと■アルミ・モビール「大仏さま」by 松村　信吾

伊藤令さん（羽衣町2丁目）と押し花バッグづくりをたのしむ

伊藤さんは押し花歴6年。羽衣町のお宅に伺うと額縁で飾られた本格的なものばかりでなく、お皿やコースター、バッグなどにさりげなく花が押されていてびっくり。今月は簡単にできる押し花の方法を教えていただいた。ちり紙とスポンジに草花をはさみこみ、タイルを重ねて電子レンジで乾燥。市販の透明フィルムで貼りつければ完成。所要時間わずか20分、味気ない紙袋が、お庭や玄関先、路傍に生える草花で素敵に彩られた。

草花をちり紙（化学繊維が使われているティッシュは不適）、スポンジ、タイルの間にはさみ、電子レンジで乾燥させる。加熱時間は1分が目安だが、草花の量によって加減していくことがポイント。

MADE IN EKUTEBIAN

メード・イン・えくてびあん

えくてびあんレポート

立川人ならやって当然

楽しんでますか? ミニテニス!

確かに最初は、立川のお年寄りのために考案されたものでした。
しかし今や全国の老若男女、あらゆる層の人たちから親しまれているミニテニス。
昨年はついに海を越え、次回五輪開催地アトランタの市民にもその輪は広がりました。
近い将来、この立川生まれのスポーツが世界中で行われ、オリンピック正式種目となるのも
もはや夢ではありません。その時になって慌てる前に、立川人なら知って当然、やって当然
スポーツの秋、みなさん楽しんでますか? ミニテニス!

●どんな道具を使うの?

ラケットはテニスのそれに比べて柄が短く軽い。ボールはビニール製、鮮やかな着色。お年寄りでも使いやすい工夫が至る所に。ラケットは¥3,500、ボールは¥390。ケイオー運動具店(羽衣町1丁目)で入手できる。

●テニスとはどう違うの?

	テニス	ミニテニス
コート	屋内外の専用テニスコート	屋内のバドミントンコートを使用
人数	シングルス・ダブルス	原則としてダブルス
カウント	15、30、40と独特のカウント方法	7ポイント先取。ジュースは無し
ゲーム	本格的にやるにはかなりの練習が必要?	初心者でもすぐにゲームが楽しめる

「誰でも気軽にわかりやすく」考えられたミニテニス。シンプルなだけにゲームに慣れてくると作戦面、技術面ともに奥深く楽しめる。

●どこへ行けばできるの?

立川ミニテニス協会には現在約30グループが加盟。市内の小・中学校体育館などで積極的に活動中。教育委員会生涯学習部体育課(泉体育館)に問合わせて、最寄りのグループを紹介してもらおう。もちろん初心者でも大歓迎。

●誰が考えたの?

昭和61年、当時立川市教育委員会で市民の体育振興に取り組んでいた天野孝一さん(錦町5丁目)が様々なスポーツをミックスし『ミニテニス』を発明。10を経て、現在ミニテニスは全国に普及され、振興の一途。来年には全国ミニテニス協会の設立が決まり、天野さんは大忙しの毎日。「ルールだ、道具だと毎晩試行錯誤していたのが、ついこないだの様です(笑)」

ひと筋の俳句、38年

〜倦まず、たゆまず、のぎくさん〜

立川市民俳句会が創設されてから三八年。その歩みと同じくして、やまやのぎくさん（富士見町六丁目）の俳句生活はある。

今年の春、体調をくずして、涙をのんで一回だけ休会した。その時、はじめてのぎくさんは、それまでの歳月において、月一回の句会を一度も休まずに続けてきたことに、自から気がついた。立川市民俳句会では年間の皆勤者は表彰されるが、のぎくさんはその常連であった。八十歳をこえてなおカクシャクとした心身は、目立たないことをコツコツとやり抜いたご褒美ではなかろうか。

ご主人、谷川水車さんら、俳人有志が集うて発足させた「立川市民俳句会」。その創設は昭和三三年だったという。

ご夫妻がこぞって俳人というケースも決して少なくはないが、水車・のぎくのカップルは会の運営という重い荷も同時に背負っていた。

――私が出ていかなければ……。

こういう責任感も手伝ったのであろう、やまやのぎくさんはコツコツと通い続け、坦々として実作に励んできた。

やまやのぎくさんの俳号の由来をエッセー集『月は東に日は西に』から引用してみよう。

――中央線、猿橋駅の手前が鳥沢駅、甲州街道で一番開発にとりのこされた宿場である。山登りのハイカーでこの扇山は賑う。この登山口に私の父祖の家はあった。十年前その廃家をとりこわし私は小さな家を建てた。敷地の三百坪の庭は雑草園ではずかしいが、梅の木と柿の木が少しみられるのかな。やまやは山家である。その門の入口に紺野菊の花道をつくっている。そこでやまやのぎくとなりました。

のぎくさんは大正二年、山梨県生まれ。昭和十年、実践女子専門学校（現・実践女子大）を卒業。

学生時代は国文学を専攻。もしかすると、当時のモガ（モダン・ガール）だったのかも知れない。学校帰りに通った映画は三十円だったという。東京に登場したばかりの「喫茶店」にも出入りしていた。

大正のモダーンな香りから現代的なセンスを吸収すると同時に、万葉や源氏物語から古典の厚みを身につけていった。のぎくさんの周りに「自由の空気」がただよっているのは、そんな背景がものをいったのであろう。

大学を卒業して小学校の教壇に立つ。同僚であった水車さんと結婚したのは間もなくのこと。

昭和二三年、水車さんの転勤に伴い、以来「立川人」となる。

☆

どんな分野でも、一つのことを四十年間続けることは至難の業である。

のぎくさんが、今日まで続けてこられたのは、一つにはこの街、立川と立川人が好きだったのだろう。「続けようと思って続けてきたわけじゃないけど、ほら、お友だちに会えるでしょう」

と、あっさり云ってのける。「座の文学」とよばれる俳句という形式がのぎくさんの体質に合っていたのかも知れない。

「俳友と交わすお互いの句評の中で、自分の中にはない価値観を語り合えるのが、とても楽しい」とも語るのぎくさん。

八年ほど前からのぎくさんは、身体をこわし、移動には車椅子のごやっかいにならざるを得ない。

「俳句をやるしかない状態でね」と笑う。逆境を利にかえて、俳句にますますのめり込んでいった。

水車さんもご自身、力作に取組みながら「この人にしか云えない、そういうものが俳句にはありますからね」と、あたたかく応援歌を送っている今日である。

「境涯俳句」というジャンルがあるが、どちらかといえば暗い。のぎくさんには、その種の暗さはみられない。

子規先生絲瓜の水がとれました

しんがりに鴉に釣瓶落しかな

雪催もの言ふごとく牛食あり

みんなのぎくさんらしい作風だ。

「ヒコーキ」を語るアメリカ人

模型飛行機製作家 伊神昭二

今年八月、本屋を歩いていて、ふとある新刊に目がとまりました。タイトルは『サムライたちのゼロ戦』（講談社刊）。ゼロ戦をはじめとして旧日本軍の飛行機に関する詳細なデータ。それを操る精鋭たちのドラマ。大空を舞う飛行機への想いに満ちた本です。著者の名を見て、私は思わずにんまりとしてしまいました。

「ああ、やってるな…」

著者はアメリカ人。名はロバート・C・ミケシュ。私とは四十年以上も前からの付き合いになります。彼は当時、立川基地に駐屯していた米空軍のパイロットでした。私は終戦で、勤務していた立川飛行機株式会社をやめ、模型飛行機製作の仕事を始めて、この十二月で満五十年になります。その間、数えきれないほど大勢のアメリカ人（航空関係の人ばかり）がお客として来てくれましたが、彼はその中でも最も信頼できる男でした。

彼は大戦中の旧日本軍用機に非常な興味を持って探求しておりました。私の知っていることを彼に教え、彼はこちらの知りたい米軍機のいろいろを教えてくれました。その頃はマスコミも今のようには発達しておらず、航空専門誌などもあまりなかったので、双方にとって大いに役に立ったものです。軍務が忙しい中を時間を割いて拙宅を訪れ、夜遅くまで「ヒコーキ」の話に花を咲かせました。私の年代は戦争中の教育で英語はあまり習っておらず、まして会話には大変苦労しました。しかしお互いに大好きな「ヒコーキ」のこと、話しているうちに解ってくるから不思議なものです。

その後、本国に帰ったり、ベトナム戦争に向かわされたりと大変苦労されたようでしたが、折々には必ず手紙をくれ、私もその都度、骨を折って英文の返事を書きました。先般、三十年以上も前に撮ってあげた彼のポートレートを昨今の発達したプリント技術で焼き増しし、贈ってあげたところ、とても喜んでくれました。彼から届けられた返礼の写真には、その三十年前の写真とまったく同じポーズをとる現在の彼が写っており、今度はこちらが喜んだものです。

彼は陽気なアメリカ人というタイプではなく、物静かな学究肌といった感じですが、早くから燃費のよいトヨペットを米国内で乗り回し、ペンシルバニアの自宅に日本間を建て増しして悦に入り、しかも床の間の掛け軸には「ヤンキー、ゴーホーム」と筆書きされていたのには大いに笑ってしまいました。空軍をリタイヤしてからはスミソニアン博物館に勤務。高級学芸員として旧日本軍機の復元や、様々な飛行機に関する著作を行っています。

終戦直後、タバコやチョコレートを基地から盗み出し、日本人に売りつけていたような米軍人も大勢いました。しかし彼のように日本を愛し、理解してくれる人の方が多くいたのだということを、私は信じています。

一昨年秋に彼が来日した折、もう一人の友人を交え、居酒屋で過ごした数時間の楽しさを忘れることができません。話？　もちろん「ヒコーキ」のことばかり…。

ところで冒頭の本を読んでいて私は誤りをみつけました。ある日本人パイロットの名が間違えていたのです。優秀な研究家である彼も、さすがにここまでは目が届かなかったか。今私は、それを早く彼に伝えたくてウズウズしています。今年のクリスマス・カードにはその事を添えておこう。彼の苦笑いが目に浮かぶようです。

えくてびあんエッセイ●No.34

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも えくてびあん！

真如苑だより

あっという間に十一月、今年ももう二ヶ月を残すばかり。冬仕度を前にして、この秋はどんな「実り」を収穫できたでしょうか？

さあ、今月も真如苑へおでかけください。お待ちしております。ほっとひと息、今年の実りに思いをめぐらせては。

■日時　11月19日(日)
　2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

表紙は語る

まい あーと
アルミモビール
『大仏さま』
by 松村信吾

ユニークな素材を使った図画や工作をとおし、創造力豊かなこどもたちを育てているアトリエ・ラパン美育研究所（国立市）では、立川市内の幼稚園・保育園でも教室を開いている。

同教室に4才の頃から通う松村信吾くんは柏小学校2年生。昔話『かさじぞう』が大好きな信吾くん、何度も絵本を読み返すうちに、登場するお地蔵さまに興味が湧いてきた。以来、信吾くんの「仏像」研究はとどまることを知らず、今では国宝級の仏像ならソラで名を言えるほど。「アニメの主人公や乗り物に夢中になるのと同じように、たまたま仏像が好きになっただけです」と笑うお母さん。信吾くんの熱の入れようにあきれながらも、「研究助手」はしっかり努めている。

同教室で毎年開催する児童画展。今年は11月5日からテプコギャラリー（錦町）で開かれる予定。

東風

立川市民俳句会は月一回、第二日曜日が例会。やまやのぎくさんは四十年近い歳月、一度も欠席したことがなかった。そのことをこの春に一度体調を崩して休んでしまったことによって、はじめて知ったという。いかにも、のぎくさんらしい話だ。月に一回とはいえ4回か5回しかない日曜日の一回を句会に費やす、これは並みたいていのことではない。まず、体調を整えなければならない、冠婚葬祭と重なることもあろう、多少の世間の義理は欠かさなければ不可能といってもよいであろう◆先般亡くなった山口　瞳さんは昭和三八年の十二月二日号から『週刊新潮』に「男性自身」を連載、平成七年八月三一日号まで千六百十四回、ただの一度も休まなかったという◆山口さんの連載は偉業に価しよう、同様に、やまやのぎくさんの俳句人生もまた、静かな感動をよぶ。俳句はもともと「自得」の文学だといわれている。大声で叫ぶのではなく、静かに内面の自分を照らす文学なのであろう。それだけに、作者の「人生」が作品の中に滲み出るのだそうである。トテ馬車の馬ににこと野菊晴／氷片を金魚に暑中見舞かな／小鳥来て東京やさしくなりにけり◆どれをとっても、のぎくさんの心象にちがいない。物事を続けること、これは稀に見る大きな「才能」に違いない◆名月や　畳のうへに

えくてびあん

月刊えくてびあん　第136号
平成七年十一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五（28）0082
FAX　〇四二五（28）1297
編集発行人　立井啓介
印刷所　紳大廣社

（編集）池田隆男　牛田影一　小杉和己　小林康史　鴨川 理　名尾居真　岩井正弘　町田健一　山田恵子　松本わかこ
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　中村 伸　五来孝平

ウォッチング

「シロヒトリ」ホイホイ

幸町・すずかけ通り。歩道に並ぶ木々にぶらさがる妙な物体を発見。市の道路課によると、これは木の枝葉を食い荒らす害虫、アメリカシロヒトリ（白灯蛾）を誘引させるためにつけられたもの。内部には薬を塗った粘着シートがあり、言わばあのゴキブリ駆除製品のシロヒトリ版と言ったところか。現在は実験的につけられているそうだが「あまり効き目はない」とのこと。すずかけ通りで人知れず繰り広げられている人と虫との攻防戦。今のところ、やや敵に押され気味。

WATCHING

多摩川の朝　4

写真：鈴木克吉
短歌：柴木　迪

朝の陽の
しろく光れる
多摩川の
皺波にのり
鴨らたゆたふ